第2回通学区域審議会事前調査票回答まとめ

Ⅰ　学級数に関すること

1　学級数が少なくなることによる学校運営上の課題

・教員の定数が少なくなり、中学校では免許外指導が生じ、教員の教科指導の負担増とともに適正な指導や評価に影響が出る。　ほか1人
・学級数が少なくなり、教員数が少なくなると免許外指導が発生するなど専門性を生かした十分なものとはならず、また、教員の負担増も発生すると考える。このことから下限値の設定等対策が必要。
・1学年3⇒2になる時、2⇒1になる時に、40人学級に近い学級ができる場合の負担感が大きい。
・縦割り対抗などのグループ活動による高めあう行事や活動の見直しなどが生じる。
・集団活動における教育効果が低下する。
・多様な価値観との出会いが減少する。
・クラス替えがないまま何年も過ごすと、児童生徒同士の人間関係が固定化し、個々の新たなチャレンジが生まれにくい。
・クラス同士が切磋琢磨する教育活動ができなくなることが課題である。
・団体で活動すべき行事（運動会・学芸発表会）の制約により、盛り上がりに欠ける内容となったり、クラス替えが6年間の長期になることで、子ども達のクラスでのポジションが固定化してしまう恐れ。地方の一町一校であれば、問題はないが、市内で差をつけるべきではない。
・学級集団としても多様な価値観や文化を融合させて向上していくということが起こりにくくなる。学校教育としては、大きなデメリットだと考えられる。
・部活動が制限される。

2　小規模校の利点・メリット

・児童生徒が見えやすく、児童生徒理解がしやすい。
・1学級の人数にもよるが、全職員で全校一人一人の学習状況や生活面（いじめや不登校の兆しなど）理解し、きめ細かに指導することができる。学習等についていけない子どもが少なくなる。　ほか4人
・学年を超えた活動場面での一人一人の児童生徒の役割や責任が高まる。
・費用対効果が高まる（コスト自体は高まる）。
・教育環境のゆとりができる。
・学校と児童の距離が近くなる。
・大規模だと体験学習や修学旅行等の受入先に制約が生じることもあるため、⑦、⑧にあるように教育活動の幅が広がることも考えられる。
・全校生徒の顔と名前が生徒も教職員も分かるようになり、相互理解のもと、家庭的な雰囲気で過ごせる安心感はあるかもしれない。
・校内行事などの集合や解散時間が短縮される。また、生徒間の距離が近くなり、一体感が生まれやすくなると思う。

3　教職員数が少なくなることによる学校運営上の課題

・（中）教員の定数が少なくなり、専門性による人事異動が制限されるとともに、免許外指導による適正な指導や評価に影響がでる（道では、中学校普通学級6学級以下でなければ免許外担当教師加配は行っていない）。
・教職員一人一人の業務（責任）の増加による身体的・精神的負担の増加する。結果として、児童生徒の負担にもなるのではないか。 ほか4人
・児童生徒への目が届きにくくなる。
・⑩教職員が少なくなれば、間違いなく免許外教科の指導をしなければならない教員が増える（学級数が減っても一定以上の教員数を確保して欲しい）。その結果、㋐教材研究や指導方法の検討にかける時間が増大し、教員の大きな負担となる㋑授業の質の低下は否めず、学力低下につながる㋒ICTを活用したサテライト授業も検討されるだろうが、「目の前にいる教員は教科を担当しているにもかかわらず、教えることができない」ということが明らかとなり、信頼度は低下するなどの影響が生じる。
・教員同士が切磋琢磨する環境を作りにくく、指導技術の相互伝達がなされにくい（教員数が少ない中学校だと教科部会などが機能しにくくなる）。
・教員間に多様な意見・議論が少なくなる。個性豊かな教師の配置が難しくなる（偏る）。
・クラブ活動や部活動指導が制限される。

4　学校運営上の課題が児童生徒に与える影響

・学習面や人間形成において、影響が生じる。
・児童生徒が切磋琢磨する環境が乏しく、学びやすいが高めあう機会が豊かではない。
・教師が主導する場面も多くなり、自主性や積極性が身に付きにくい。
・（中）現在、99％以上の生徒が高校進学をしている中で、いずれも少なくなることにより、人間関係の固定化、閉鎖性などが生じ、多様性の中での社会性やコミュニケーション能力が身につきにくく、ギャップが生じる。　ほか1人
・コミュニケーション能力やリーダーシップ育成への影響
・交友関係の固定化による弊害。友人が少なくなり、仲間はずれになった場合など、改善が困難。　ほか1人
・挙げられる事項はどれもそのとおりで生徒の不利益となる。
・児童生徒へは、種々の影響があると思うが、影響を極力抑える対策が必要と考える。
・1学級における人数は多からず、少なからずが良い。指導のしやすさは、良い循環を生むと思う。

Ⅱ　児童生徒数に関すること

1　学級における児童生徒数

・集団活動や行事などの教育効果への影響が生じる。児童生徒の能力差・個人差等が見えやすい。
・集団活動における教育効果が低下する。
・多様な価値観との出会いが減少する。
・個が持つ特性の影響を受けやすく「普通」と「特殊」の価値観が逆転してしまうことが心配される。
・多様な他者の中で客観的に自己を見つめアイデンティティを確立させていく育ちは遅れてしまうかもしれない。
・小学校の場合、6年間同じメンバーで過ごすと何でも分かり合える面もあるが、多様な考え（新しい刺激）に出会えないことも多いと思う。
・協働による団結や競争がおきにくい。序列ができてしまうと長期になる。
・部活動などが制限されるのは、課題だと思う。
・学校内外の活動において、児童生徒一人一人の果たすべき役割や負担が多くなる。
・各学年で１学級が確保されていれば、問題ないように感じている。
・クラス内で男女比の偏りが生じやすいぐらいで大きな課題はないのではないか。
・教育効率の低下や集団学習の制約等が生じることから、最低限の児童生徒数の基準を設ける等対応が必要と考える。

2　学校全体の児童生徒数

・運動会や学芸会の種目・内容について、見直しを図りながら、児童生徒への充実感は継続していきたい。
・学年間の生徒数にも差が生じ、バランスが崩れ、学校行事に影響がある。ＰＴＡ活動も一人の保護者の負担増。
・行事や活動における（バス移動など）諸経費の個人負担が大きくなる。
・男女比の偏りがでる。
・異学年コミュニケーションの機会・場が限定的となる。
・施設の環境維持も難しくなると思う（手入れが行き届かない。使わないことで劣化するなど）。
・クラブ活動や部活動の選択肢やその指導運営に支障がでる。
・部活動などが制限される。
・クラブ活動や部活動の種類が限定され、参加人員が減少することにより、本来、得ることができる経験ができない可能性があり、対策が必要。
・部活動の種類が限定されてしまう等あるが、大きな課題はないと思う。
・「上級生・下級生間のコミュニケーションが少なくなる」については、理由がわからない。逆のように思う。 ⇒回答：「上級生と下級生間」を「上級生（先輩）と下級生（後輩）という関係」でのコミュニケーションと捉えれば、合理的に解釈できる。また、本市では生じ得ないが、上級生や下級生となる学年に1人も児童生徒がいない場合もありうる。

Ⅲ　その他

・小学校よりも中学校の生徒数や学級数の減少による課題や影響は大きい。まずは、子ども達が全国のどの地域で教育を受けても、一定の水準の教育を受けられることを前提として、（学校間で課題や格差が認められる場合の対応も含めて）審議する必要がある。
・ＢＰ建設決定を受け、本市の人口推計は全く違ったものとなり、地区別に差は出ると思うが、今後の状況を見る必要がある。
・地域で子どもを育てる土壌が整っているなど、人数が少なくなったからといって統合とはいかない地域もある。地域によっては小規模校であっても施設を接続し、小中一貫校にするなどの方策が考えられるのではないか。
・地域にとっての学校は、従来の認識では重要であるが、教育の多様性や資源の集中することの効果を期待し、統合・小中一貫校を設置する等、子ども達にとって、魅力のある学校・楽しい学校を創っていくことが必要と感じる。
・児童生徒数が減って、学校数が減らない場合、1校あたりにかけられる予算はどうなるのか知りたい（様々な補助金も含めて）。 ⇒別途回答